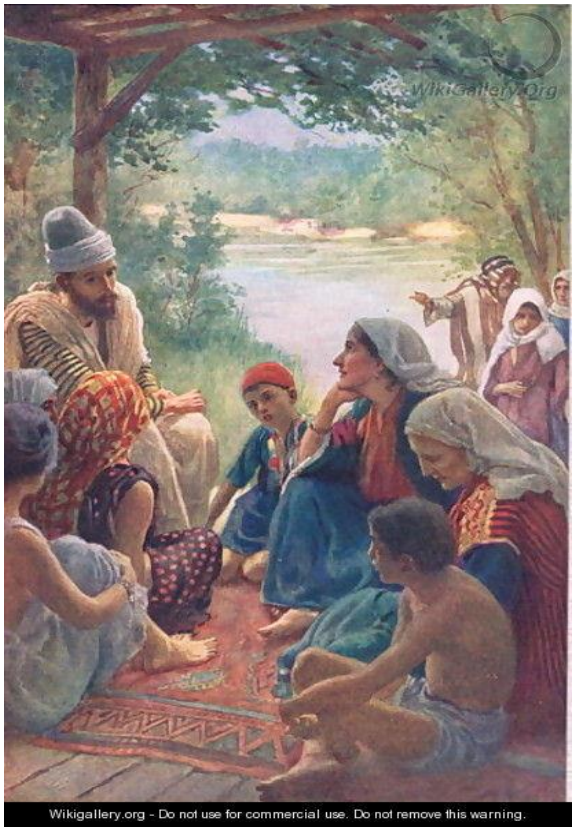

イギリスの画家　ハロルド・コッピング(1863–1932)

2023 年 10 月 22 日　説教「紫布の商人ルデア」

使徒の働き 16 章 11～15 節

パウロ一行の第二次伝道旅行は、キリキヤからデルベ、ルステラを経てから、アジアに向かう道を禁ぜられた後、北に進んだのですが、今度はビテニヤに進むことも聖霊によって止められて、西方に進むしかありませんでした。そして辿り着いたのがトロアスの港でした。

１．船に乗って（11 節）

①ネアポリスに（11）**「そこで、私たちはトロアスから船に乗り、サモトラケに直航して、翌日ネアポリスに着いた。**

ここで「私たち」とありますが、実をいうと使徒の働きを記したルカもこの伝道旅行に連なっていたのです。医者であるルカは船や海の事などにも通じていました。だからこそ、パウロの旅についても、詳しく記すことができたのです。この後、しばしば「私たち」とある時には、ルカがそこにいることを考慮する時に何かを発見するかもしれません。さて、パウロはトロアスで幻をみました。マケドニヤの人が「来て、助けてください」と懇願していました。これは、主なる神が促しておられるのに違いないと思い、トロアスから彼らは船に乗って、マケドニヤ方面に進むことにしたのです。直航したサマトラケはいわばマケドニヤの入口でした。ネアポリスは新しい町という意味で都市ピリピの南東 16 キロほどにある港でした。この港をパウロ一行は第三次伝道旅行でも寄っています。

２．ピリピでの宣教（12～13 節）

①ピリピに滞在（12）**「それからピリピに行ったが、ここはマケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった。私たちはこの町に幾日か滞在した。**

ネアポリスで上陸したパウロ一行は、都市ピリピに向かいました。この町は、「この地方第一の町で、植民都市であった」とありますが、ローマ帝国が直轄する都市でした。ピリピは英語ではフィリッピ（Philippi）ですが、アレキサンダー大王の父フィリップになぞらえて名づけられた町です。パウロは後にこの町の教会に、「ピリピ人への手紙」を記しています。私達が親しんでいる書簡です。パウロ一行はこの町に幾日か滞在することになりました。

②川岸での集会（13）**「安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰をおろして、集まった女たちに話した。」**

この時代に記された「安息日」は、まだキリスト教会の間でも、旧約時代を引きずっていて、土曜日であったと考えられます。彼らはピリピの町と外を隔てる門を出た所にある祈り場に向かいました。ユダヤ人たちは川べりに祈りの場所を設け、そこを集会場としていました。そこで、パウロ達は腰をおろして、集会を開きました。それは主に女性たちが集まる会で

した。裏ページの想像画にあるように、子供達もいたことでしょう。そこで、キリストの福音を語ったのです。

３．ルデアとその家族の救い（14～15節）

①紫布の商人（14）**「テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデアという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。」**

テアテラ市はエーゲ海を隔てた所にあるアジアの町で、ヨハネの黙示録の七つの教会の一つです。そこには、亜麻布、銅細工、皮革加工、染色、羊毛の紡織などの業者の組合がありました。ルデアはこの町の出身で、紫布の商人でした。紫布はテアテラの地方で産出されたあかね草の根で染めた布でした。彼女はその紫布をピリピの地で扱う商人でした。ユダヤ教に連なる敬虔な信者でした。パウロ達一行が、ピリピの地にやって来て、祈り場で集会をすると聞いて、やって来たのです。その時に彼女の心が開かれたのです。パウロによって伝えられた、キリストという方が救い主であり、彼女の罪のために十字架にかかりよみがえってくださったということを、素直に受け入れたのです。

②バプテスマを受け（15）**「そして、彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき、彼女は、『私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊りください。』と言って頼み、強いてそうさせた。」**

ルデアはイエス・キリストを救い主として信じました。そして、そこにいた家族とともにバプテスマ（洗礼）を受けたのです。家族とは、おそらく彼女が連れてきた子供達ではないでしょうか。即座にバプテスマを受けることに導かれるほどに、与えられた信仰が明確であったのでしょう。ルデアはこの喜びをかみしめながら、パウロ達一行を自宅に熱心に招いたのでした。「私を忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊り下さい。」彼女の生活の拠点は既にピリピにあり、商売がうまくいっていて、経済的にもゆとりがあったのではと思わされます。いずれにせよ、ルデアはピリピの教会の最初の信者となりました。

《結論》

ヨーロッパで最初にクリスチャンになったのは、紫布の商人ルデアでした。彼女が救われたのは、神の恵みとしか言いようがありません。元々、アジアのテアテラ市出身のルデアは紫布についての知識と商才を用いて、ピリピで、高級布地を売る商売がうまくいき、不自由なく生活していたと思われます。少し境遇が似ているルカの福音書 19 章に出てくるザアカイは直接、イエス様とお会いして救われました。一方、ルデアは、パウロを通して、イエス様について教えられました。彼女はそれまでも神を信じていましたが、救いの確証がなかったのだと思われます。キリストが自分の罪の身代りとして十字架で死んでくださり、よみがえられたと聞き、この方こそ自分の救い主と信じたのでしょう。経済の豊かさでは得られない平安をいただくことができたのだと思われます。ザアカイの場合はイエス様の方から家に来て下さり、ルデアはパウロ達を自宅に招いてもてなしていて共通しています。

そして、何よりも二人の重要な共通点は、ザアカイの場合はイエス様を通して、「きょう、救いがこの家に来ました。」と言われ、ルデアも家族と一緒にバプテスマを受けたということです。聖書の神の恵みは、一人一人が神の前に出て、信仰告白するところに働かれます。しかし、主は家族への恵みを与えてくださる方です。旧約聖書を読んでいくと、主なる神はイスラエルの民、部族、家族への恵みを与えてくださる方であることがわかります。そして、新約時代でも、ザアカイに「今日、救いがこの家に来ました。」とあるように、家、家族に対して主は恵みを注いでくださるのです。ルデアの場合も、彼女に与えられた信仰と、自覚的に信じた子どもはもちろん、まだ幼子である者たちにも恵みが注がれていることがわかります。「彼女とその家族がバプテスマを受けた」とあるとおりです。

長老教会では幼児洗礼を行うのですが、それも家族への恵みという考え方に基づいています。恵みの契約は、親の信仰を通して子供にも及ぶというとらえ方からです。幼児洗礼を受けた子供は、恵みのうちに歩み、適当な年齢になった時に、信仰告白式にあずかっていくのです。

日本のクリスチャンの人口は1％に満たないと言われて久しいです。その一つの因が信仰を個人のものとしてとらえ過ぎるところです。それはそれで良いのですが、個人への主の恵みは家族にも及んでいくという考えが希薄です。一人が救われても家族には関係なしと考えやすいのです。主の前に一対一になっていくことは不可欠です。しかし、与えられた恵みが家族にも広がっているという考えが弱いです。そこで家族のなかで一人だけが教会に連なっているというケースが多いのです。もちろん家族にも信仰や生き方の自由があり、家族の意思を尊重する必要があります。しかし、もっと信者の家族は祈られる必要があります。

日本同盟基督教団の入江牧師は去年の６月から佐賀県への開拓伝道を始められたとのこと。27 年間福岡での開拓伝道から始め、教会形成をされていた御夫妻が「全県に同盟の教会を」という教団のビジョンのもと、打診をされて、祈りのうちに導きを得られたそうです。今年 6 月には長くクリスチャンであった妻から祈られてきた男性が洗礼を受けられたとのこと。家族が救われるという良い出発が与えられたのだと思います。日本長老教会でも東北での開拓伝道が勧められていますが、家族への広がりが与えられていくように、祈っていきたいものです。全国の教会のクリスチャンの家族が、ルデアの家族のように、主に導かれるように祈っていきたいものです。

私たちの教会においても、家族の救いのための祈りを深めていきましょう。自らの救いの恵みは既に家族にも及んでいると信じて、証をしていきましょう。御言葉を伝えられて、キリストの福音が広がっていきますように。